

糸つむぎ部屋の風俗史

浜 本 隆 志

もくじ

1 「眠り姫」の謎	190
2 消された性的場面	192
3 糸つむぎ部屋とは	199
4 糸つむぎ部屋のどんちゃん騒ぎ	204
5 謝肉祭劇における糸つむぎ部屋	208
6 糸つむぎ部屋の歌	211
7 肝だめし	219
8 タブーと違反	221
9 教会と当局による糸つむぎ部屋の禁止	225
10 民衆文化としての糸つむぎ部屋	228

1 「眠り姫」の謎

ペローの『眠れる森の美女』(1697年)、グリム兄弟の『いばら姫』(1812年初版)、映画化されたディズニーの『眠りの森の美女』など、一連のいわゆる「眠り姫」シリーズにおいて、主人公の王女が予言どおり糸巻き棒(錘)に刺され、100年間眠るというシーンがある。この前半部の有名なクライマックスの場面は、人びとの脳裏に深い印象を与えるけれども、なぜ糸巻き棒に刺されると眠るのか、その眠りの理由が何であるのかはまったく説明されずに、原因不明のまま話が展開される。この糸つむぎの場面は、いったい何をあらわしているのだろうか。これはたんに、夢のようなメルヒェン特有の非現実の話であるのだろうか。

糸つむぎの歴史は古く、昔から女性たちは、糸巻き棒による単純な作業に従事してきた。すでに神話の中にも、糸つむぎが女性の神聖な仕事として重視され、糸巻き棒はギリシア神話の運命の女神モイラや、北欧の結婚の女神フリーヤの持ち物であった¹。古代ローマでは結婚式の行列

の中に、糸つむぎの道具を持つ女性を加えられている。さらに中世のキリスト教社会において、糸巻き棒はマリアの属性とされ、「糸巻き棒の福音書」なる教えが広まった。ここでは糸つむぎが宗教と結びつき、女性のあるべき姿の手本が示されている。すなわち、糸つむぎを勤勉にこなすことができる女性が女の鑑とされ、幸福な家庭を築くことができるといわれてきた。こうして糸つむぎが女性への教訓となって、その教えは母から娘へと伝えられてきた。

以上の意味において、ヨーロッパの神話、福音書、伝説、メールヒェン、詩歌などに、糸つむぎのモチーフが多く認められるのであるが、これは女性の運命や通過儀礼と無関係ではなく、何か深い意味を暗示しているようである。とくに冬の夜長に、糸つむぎをしながら語り伝えられてきたメールヒェンの中に、糸つむぎをめぐる話が多い。たとえば、『ホレおばさん』に登場する女の子は、泉のほとりで血のついた糸巻き棒を洗っていて、それを泉の中へ落としてしまう²。ここでも血のついた糸巻き棒は、女性の勤勉な労働のシンボルとされているが、さらに深い性的意味をもつと解釈することも可能である。また『3人のつむぎ女』でも、糸つむぎと結婚問題が結びついていることが分かる。われわれが問題とする「眠り姫」の糸つむぎの場面も、その延長線上に位置づけられる。

まず、糸つむぎの意味を解明するためには、「眠り姫」類話のルーツをたどり、その中で問題のシーンがどのように描かれているかを確認しておく必要がある。というのも、改作や粉飾されていない原典を見れば、糸つむぎの場面の本来の意図が明らかになると思われるからである。その結果、メールヒェンという子供向けの話では、意図的に排除されていた性的場面が浮かび上がってくるのであるが、さらに糸つむぎの場面と、中世後期から近代の糸つむぎ部屋の習俗とを比較すれば、両者には奇妙な一致点が見いだせるのである。

したがって本稿の眼目は、「眠り姫」のメールヒェンのモチーフを手がかりにして、ヨーロッパにおいて糸つむぎがおこなわれていた場所、すなわち「糸つむぎ部屋」の風俗を解明し、その実態を考察することにあるが、それによって、文学のみならず民俗学や社会学にもいささか寄与することができるであろう。とりわけこの風俗は、日本においてほと

んど紹介されず、実態が明らかでなかったのも、その意味においても、拙論を草する意義はあるといえる。

2 消された性的場面

まず「眠り姫」のルーツとしては、ボルテとポリーフカのグリム・メルヒェンの注に詳しい³。それにしたがうと、「眠り姫」の類話は各地に広がっており、ギリシア、ローマ、スペイン、カタロニア（スペイン北東部）、クロアチア、フランス、ロシアのみならず、アラビアにもみられる。むろん細部ではそれぞれ相違があり、糸巻き棒のかわりに縫い針で刺されたり、眠るかわりに石になったり、塔の中で眠っている乙女を「魔法の薬草」によって目覚めさせたりするものもある。スペインの類話では、男性と女性の役割が入れ替わって、救済するのが女性であるが、これは母権制の名残りを留めているといえよう。これらのヴァージョンはおもに南ヨーロッパに広がっていることや、登場する女神の名前などは、そのルーツが楽天的なラテンの世界にかかわるものであることを暗示している。

さて、われわれが入手できるもっとも古い話は、「14世紀に古フランス語で起草された『ペルセフォレ』」⁴である。これは論旨を展開するうえで、欠くことができない話であるので、その概要を紹介しておこう。

とある王国に王女が誕生し、ゼランディーヌと名づけられるが、その誕生のお祝いに3人の女神が招かれた。女神リュシーナはゼランディーヌに健康を授けるが、女神テミスは自分の席にナイフがないのに腹を立て、こう宣告する。王女が糸巻き棒から最初に亜麻糸を引っ張る際に、亜麻糸の刺が指に刺さり、これが抜けるまで眠り続けると。だが、女神ヴィーナスはそれが元通り治ると予言する。やがて王女は、花のように美しい乙女に成長するが、ある日、老女の持つ糸巻き棒に興味を示し、触ると刺されて予言通り眠りに陥ってしまう。城は閉ざされたけれども、王女に求愛していたトロイリュスという騎士がいて、鳥の背に乗って空から城へ侵入する。彼は恋しい人が眠っているのを見つけ、思わず抱き締めてベッドを共

にする。そして愛のしるしの指輪を取り替え、鳥に乗って飛び去った。

王女はやがて子を宿し、9か月後に赤ん坊を生むのであるが、その子は乳房のかわりに母親のきしゃな手を吸ったので、手に刺さっていた刺が抜けて、彼女は眠りから目を覚ます。やがて国王は馬上試合のお触れを出すと、トロイリウスが現れ、他のすべての騎士を打ち破る。彼は美しいゼランディーヌ王女に自分の存在を認めさせ、一緒に立ち去るのである⁵。

舞台は中世騎士の時代であるが、この話の中に『眠れる森の美女』や『いばら姫』の骨格ともいえるべき、姫の誕生、女神による予言、刺に刺されて眠りに陥ること、覚醒および勇敢な求愛者と結ばれることなどのストーリーが展開されている。しかしそれと同時に、ここでは睡眠中に性的関係が結ばれて妊娠し、子供が生まれるという場面が描かれていることは、とりわけ注目しなければならない。

次に『ペルセフォレ』とならんで、「眠り姫」のルーツとしては、『太陽と月とターリア』（1637年）が知られている。これはイタリア詩人バジレの『ペンタメローネ』に収録されている話であるが、その概要は次のようである。

とある国に王様がいて、王女ターリアが生まれたので、王は娘の将来を占い師に予言させた。すると王女は亜麻の刺に刺され、身の危険にさらされるという。驚いた王は亜麻をことごとく排除させた。しかし王女は成長したある日、おばあさんが糸巻き棒を回しながら通り過ぎるのを見かけ、興味を示してそれを自分でやってみる。すると王女に麻の刺が刺さり、そのために彼女は死んでしまう。だがターリアは実際には死んでいたのではなく、魔法にかけられて眠っていたのであった。それを知らない王様は悲しみのあまり、娘を宮殿の中に残して鍵を掛け、城を捨てて旅立った。

やがてしばらくすると、別の王が狩りの途中にこの森の城へやってきて、見失った鷹を探しているうちに、眠っている王女ターリアを

見つける。不思議に思って、王はその美しい娘を目覚ませようとするけれども、眠ったままであった。王は美しい彼女を見ていると情欲を催し、そのおとめの誇り、すなわち処女を奪う。城を去った王は、政務のため彼女のことをしばらく忘れてしまう。だが、例の行為により、ターリアは妊娠して9か月後に双子の赤ちゃんを産むのであるが、それでもまだ眠り続けたままである。あるとき、赤ちゃんのひとりがお乳をまさぐっていたけれども、見つけることができずに、たまたま刺の刺さった指を強く吸ったので、それが抜けてかの女は目を覚ました。

さて狩りをしにきた王は、ふと美しいターリアのことを思い出し、再び城へやってくる。すると、彼女が目を目覚ましており、しかも「太陽」と「月」と名づけられた双子のかわいい赤ちゃんさえいたので大喜びし、ターリアのことが忘れられなくなってこの城に通う。しかしその秘密が王の後に知れ、嫉妬に狂った後は、料理人に命じて双子を料理して王様に食べさせようとするが、料理人が機転を効かせてかわりに小羊を料理する。さらに後はターリアを火の中へ投げ込もうとするけれども、王が逆に后を火の中へ投げ入れ、ターリアと結婚し、双子ともども幸せに暮らすのである⁶。

『太陽と月とターリア』の王は、最初、情欲に駆られて眠っている彼女と性的関係を結ぶという、男性の本能的側面をさらけ出しているが、しかしこの話の中でも、亜麻の刺に刺され、眠りの中で性的交渉をもち、やがて出産をむかえるというシーンは、『ペルセフォレ』と同様に描かれている。すなわち「眠り姫」のルーツである両作品とも、糸つむぎや眠りとの関係において、性の場面が存在していたことは、注目しなければならない事実である。以上の二つの話において、糸巻き棒や亜麻の刺に刺されて眠る場面は、少女が大人の女性となり、男性と交渉をもち、やがて妊娠するという共通の意味をもっていると理解できる。これはいわば女性の通過儀礼を示していると考えられる。巫女や予言者が、生まれた女の子の将来を予言するのは、かつてヨーロッパにおいて、よくこなわれていた慣習であった。「眠り姫」における予言者もその系譜に属し、

女性のたどる運命を予言したのである。

ところで『太陽と月とターリア』は、ペローの『眠れる森の美女』の素材になっていることは、両者を比較すれば明らかである。ただ、ペローの話は、糸巻き棒の場面において、男女の交わりや性については、意図的に排除されている。さらにペローの場合、王女の相手として登場するのは専制的な王でなく、やさしい王子であって、彼はキスもしないで王女を目覚めさせる。そして王女は王子を待ち焦がれており、王子も彼女が好きになったので2人はみんなに祝福されて結婚する⁷。このように『眠れる森の美女』では、男女の夢のような恋愛感情に力点が置かれ、いままでの話にあった睡眠中の性交渉・妊娠・出産というモチーフは、すべて削除されている。この倫理的な改作は、ルイ王朝や宮廷を意識したペローの配慮であると考えられる。

同様に、グリム兄弟がペローの『眠れる森の美女』を翻案して、『いばら姫』にしたことはよく知られている。グリム兄弟は、フランス系ユグノーの子孫のマリー・ハッセンプフルークからペローの話を口述筆記し、それをもとにして改作したからである。ではグリム兄弟の『いばら姫』(決定版)の筋を、簡単に要約しておきたい。

とある国の王様とお妃のあいだには子供がなく、ふたりは子宝を切望していた。ある日、お妃が水浴びをしていると、蛙が出てきて1年もしないうちに女の子を授かるでしょうという。事実、そのとおりになったので、王様はたいへん喜び、盛大にお祝いのパーティを開いた。招待した賓客の中に12人の女占い師がいたが、彼女たちはそれぞれ王女に最高のお祝いの言葉を贈って、祝福する。こうして11人目がいい終わったとき、突然、そこへ招待されてなかった13人目の女占い師がやってきた。彼女は、王女が15歳になると糸巻き棒に刺されて死ぬと予言する。するとすぐ12人目の女占い師が、王女は死ぬのではなく100年の眠りにつくと言って、その予言を和らげる。驚いた王様は、娘の身の安全をねがって、ただちに国中の糸巻き棒を廃棄させた。

やがて王女は美しい娘に成長し、15歳を迎えるのであるが、たまた

ま両親が城を離れた日に、ひとり城のあちこちを探索しているうちに、塔にたどりつく。その入り口に鍵が差し込んだままになっていたので、王女は中を開けてみた。すると老女がひとり糸つむぎ車をまわしていた。好奇心の強い彼女は、それを自分でやろうとし、糸巻き棒にさわったとたん、予言どおりそれに刺されて眠り込んでしまう。同時に城のすべての者も眠り、そのまわりにはいばらが茂って、だれも入れなくなった。美しい王女が眠っているといううわさを聞きつけて、多くの王子たちが城の中へ入ろうとしたが、いばらの刺に刺さって死んでしまう。それからちょうど100年目に、ひとりの王子がそこへ入ってゆくと、いばらは花開き、彼は無傷のままであった。王子は眠っている王女を見つけ、キスをすると彼女は目をさます。王女はすぐに王子が好きになり、2人は結婚してしあわせに暮らしたという⁸。

『いばら姫』ではペローの場合と同様に、男女の性的関係を示す場面はすべてカットされている。そのかわり、とくに糸つむぎの場面は100年の眠りとなって、メールヒェンらしく夢の世界の中の出来事となるのである。グリム兄弟はこの話のみならず、すべてのメールヒェンにおいて意図的に性的な場面を排除している。というのも彼らは、童話集を「家庭と子供のためのメールヒェン」と位置づけ、子供に対して教育的配慮をしたからである。

ところが糸巻き棒は民俗学では、男性の象徴であるというのが定説であって、これは男性の隠語として巷では古くから言い伝えられてきた。したがって、ペローやグリムは倫理的・教育的配慮から、性的な場面を排除したけれども、糸巻き棒に刺されてベッドで眠るというモチーフは、見る人がみれば性行為を暗示するものであった。グリム研究者のフェッチャーは、『いばら姫』の糸つむぎの場面では原典と同じく、ここで王女は男性と性交渉をおこなったという解釈をしている⁹。また、王様がメールヒェンの中で執拗に国中の糸巻き棒を廃棄させようとしたのは、根底においては王女を男性から遠ざけようとしたことを意味しているとされる。さらに王女は、男性から意図的に隔離されて育てられてきたの

で、彼女は両親が外出した折りに、がんじがらめの抑圧から逃れるべく、好奇心に駆られて未知の世界を探索したとも理解できる。その上、糸つむぎの場面の直前に設定されている塔の場面において、王女が「鍵」の掛かった扉を開けるのは、大人の世界に入ることを示している。というのは「鍵」と「錠」は、男女の性的シンボルを意味するからである¹⁰。

以上の点に、注意深い読者は気づくであろう。しかし大部分の人は、かぶされたヴェールの中まで覗かずに、メールヒェンの夢のような表面の世界に没入するのである。メールヒェンの多くが王子、王女を主人公にしているが、これは民衆が自分たちの生活や夢を、当時の最高の身分において表現することを好んだためである。だからここにも当然、民衆の実際の生活が映し出されていたと考えるべきであろう。

メールヒェンの糸つむぎの場面のみならず、糸つむぎが男女の出会い、あるいはその運命を示唆する文学作品はいくつか存在する。たとえばゲーテの『ファウスト』の中で、グレートヒェンは糸車に向かってこういう。

胸はこがれ
思いはつもの。
あのやすらぎは もう
けっして もどってこない。

あこがれはただ
そのひとを追う。
ああ、この腕に
しかと捕らえて、

思いのままに
くちづけを。
たとえ その人のくちづけに
この身は消えて失せるとも¹¹。(手塚富雄訳)

ゲーテはこの「糸つむぎ部屋」の場面において、彼女とファウストとの

愛の行為とその結果をきわめて暗示的に描いたといえよう。最後の行は、
嬰兒殺しをしたグレートヒエンの悲劇的運命を予言している。これは男
女の奥深い業ともいえる世界を普遍化したものであるが、たしかに彼女
のモデルが、実際にフランクフルトにおいて、嬰兒殺しをして処刑され
たズザンナ・マルガレータ・ブラントであったとしても、ゲーテは当時
の糸つむぎ部屋の習俗を念頭に置いていたのではないかと推測される。
というのも、彼は『糸をつむぐ娘』という詩を書いているからである。

わたしは せっせと
こころ静かに 糸を繰る
すると きれいな若者が
わたしの錘の すぐそばに
姿をあらわした

亜麻に似ている きみの髪
つむいだ糸がきれいだね
こうしてほめて ほめちぎる
悪い気など するはずがない

じっとはしない その人だから
わたしの気持ちは乱れるわ
すると 切れずに長くつむいでた
糸がぶつり まっぶたつ

石のおもりで
たくさん つむいでいたものを
ああ そんな仕事など
自慢なんか もうできないわ

.....12

こうしてこころ静かに糸をつむいでいた娘の気持ちも、若者によって乱される。ここにも男女の恋愛感情と糸つむぎの作業が密接につながっている場面が描写されている。

以上述べた「眠り姫」における糸巻き棒の意味、あるいは『ファウスト』の糸をつむぐ場面や『糸をつむぐ娘』の背後の世界をよりはっきりと確認するために、民衆の実生活において、糸つむぎ部屋で実際、何がおこなわれていたのかを見てみよう。

3 糸つむぎ部屋とは

糸つむぎ部屋の起源は中世に求められる。冬の夜、娘たちは糸巻き棒を持ち、村の糸つむぎ部屋に集まって、共同で糸つむぎの作業をした。この集いは、「夜の集い」ともいわれ、すでに14世紀には記録にあらわれ、とくに16世紀から19世紀¹³にかけて、フランスやドイツを中心にスカンジナビア地方を含め、ほとんど全ヨーロッパ地域に広がっていった。こうして糸つむぎ部屋は、地縁にもとづく農村共同体の重要な習俗となったのである。

農村では農耕、牧畜、森林の管理などにおいて、共同作業がよくおこなわれた。また糸つむぎの原料の亜麻の収穫、乾燥、精製などでも多くの人手が必要であった。たしかに糸つむぎの労働は、各家庭でも実施されたが、その単純な繰り返し作業の気をまぎらわせるために、共同でおこなわれることが多かった。つまり作業はそれほど楽なものではなく、根気と忍耐力が求められたからである。さらに当時、灯火や暖房のための費用がかさむので、人びとは村の一定の場所に集まって、その節約を図っている。糸つむぎ部屋が「明かりの部屋」¹⁴ (Lichtstuben) とも呼ばれる所以である。とくにヨーロッパの冬は、日が早く暮れるので、人びとは寒くて長い夜を過ごさねばならなかった。当時の農民たちにとって、単調かつ変化の乏しい日常生活の中では、暖炉のまわりでくつろぐだけでも、ずいぶん贅沢なことであった。

さて糸つむぎ部屋は、娘のいる家が順番に場所を提供するというかたちで運営されることが多く、特定の場所に常設されている例は少なかった。やがてそこでは糸つむぎだけでなく、縫い物、繕いものなどの「夜

なべ」もおこなわれた。人びとは土曜・日曜以外の平日に、毎日ではなかったが、定期的にここへ集まっている。その期間は戸外での農作業が少なくなる、聖ミカエル祭（9月29日）から、聖母マリアのお清めの日（2月2日）までか、あるいは遅くとも3月中旬までであった。これが本論のテーマである糸つむぎ部屋の表側の姿である。

ところが裏の世界もあるのが世の常である。たしかに女性たちは、糸つむぎ部屋へ糸巻き棒や糸巻き車を持ち寄り集まった。糸つむぎという大義名分があったので、彼女たちははばかりもなく外出できた。しかし実のところ、糸つむぎ部屋は、たんなる糸つむぎのための共同作業をする場だけではなかった。娘たちの集まるところに、村の若者たちも顔



In der Spinnstube, Holzschnitt, 16. Jahrhundert, anonym

出すのが世のならいである。糸つむぎ部屋では、近所のうわさ話、民話やめずらしい話などが披露され、やがてその場は男女の歓談と発展してゆく。糸つむぎ部屋は、娯楽の少なかつた当時の田舎の人びとにとっては、格好の息抜きの場であった。その意味において糸つむぎ部屋は、日常の憂さを晴らす絶好の機会でもあったといえる。糸つむぎ部屋の集いは、版画や絵画にもいくつか描かれているが、前ページに引用したのは、16世紀の版画である。

とくにクリスマス、新年、聖母マリアのお清めの日、謝肉祭などの特別の日には、パン、チーズ、ソーセージなどの簡単な夜食、ビールやシュナップスなどの酒類、後の時代には紅茶、コーヒという新しい飲み物を用意するようになるのも、自然のなりゆきでというものである。(なお、コーヒーがヨーロッパに入ってきたのは、17世紀ごろであったが、このめずらしい飲み物は、人びとの関心をひき、都市部では「カフェハウス」を生みだし、18世紀にはドイツの田舎にも広がっている¹⁵。)やがて男女がゲームやダンスに興じたり、あげくに楽器類を持ち込んで演奏し、民謡やはやり歌の合唱という次第である。しかし最終目的はいうまでもなく異性であった。

若者たちはお気に入りの女の子のそばに座り、最初のうちは糸つむぎの際に膝に落ちる糸屑を払ってやるという作業をおこなった。娘たちは気に入った若者の前へ、糸つむぎの道具をわざと落として拾ってもらったり、合図を送って意思表示をすることがあった。しかし糸つむぎの共同作業は、別の男女の共同作業へと発展してゆく。風俗研究者のフックスは、若者たちの糸つむぎ部屋における行動を次のように描写している。

若者がより大胆に思い切った行動をおこせば、女の子の間では、それだけいっそう彼の評判は高まり、当の女の子も女性仲間からうらやましがられた。……みんなが集まる糸つむぎ部屋での作業は、たいていは性愛と猥褻の隠れみのにすぎず、女の子の大多数が、もっぱら若者たちによって夜にその種の振る舞いを受けるために、糸つむぎ部屋に駆けつけたのである¹⁶。

このような行動は、偶然、部屋の明かりが消えたりすると、ますます大胆になってエスカレートした。それを期待して、意図的に明かりを消すものもでる始末。やがて暗闇で男女の望むことが始まる……。当時の慣習では、女性はつつましやかであるべきだとされたが、必ずしもそうばかりではなかった。たとえばフックスは、糸つむぎ部屋を照らしていた松明の灯火が消えたときのことを、次のように述べている。

松明の明かりがドアを開けた時とか、あるいはその他の偶然によって消されてしまうと、それは毎夜生じたことなのであるが、若者のだれもがもちろん、このチャンスを徹底的に利用し尽くした。その際、女の子の方もそれにふさわしい応対を躊躇するものはいない。そのような機会には、行動が一般的にどんちゃん騒ぎになることもまれではなかった。どんちゃん騒ぎは参加している各人の好みによっても合致したので、連中はたえず、偶然の助けに執着した。それで糸つむぎの晩には、規則的に2、3度明かりが消えた。そのような類いの糸つむぎ部屋のどんちゃん騒ぎから、混乱状態のことを、「それはまさに糸つむぎ部屋のお祭り騒ぎだ」という通俗的な言い回しが生まれたのである¹⁷。

こうして男女の性的な結びつきにまで発展することもあったが、実際には周囲の眼差しもあったので、一般に、糸つむぎ部屋の中で最終行為におよぶことはそう多くはなかった。広い野原や森に囲まれた農村では、男女の関係は昼のあいだに、野外でというのが通例である。いずれにしても、これはいささか誇張のように思える糸つむぎ部屋の実態であるが、しかし教会や当局が、糸つむぎ部屋を「不道德」で「悪の温床」と決めつけ、取り締まろうとして、何度も禁止令を出していることを勘案すれば、フックスの見解はけっして的外れとはいえない。しかし、フックスのみから引用するのは一方的であるので、フェッチャーの見解にも触れておこう。

共同の糸つむぎ部屋が、全中世のあいだやさらに18世紀にいたって

もなお、長い冬の夜、好んでエロティックな戯れに利用されることが多く、こうして事実また妊娠という結果にもなり得たことは、今や周知の事実である。女中やれっきとした家の娘たちが糸つむぎをしているあいだに、若者たちが歌を歌い、愛撫して若い娘らに取り入ろうとしたものである¹⁸。

さらにボルネマンの『巷間性事典』にも、こう記されている。

南ドイツの山岳地方では、冬の季節に亜麻の精製や糸つむぎの際に、とくべつ生々しい、みだらな騒ぎに発展することが多かった。……当地の糸つむぎ部屋では、娘が色とりどりのリボンを結んだ樅の小枝を、若者たちの中へ投げ入れることをよくやった。その後、彼らがそれを奪い合うのである。これを手に入れたものが、もっとも美しい「糸つむぎ部屋の花嫁」といわれる娘を得た。したがってこの小枝は、性的な意味をもつものであった。……¹⁹

「糸つむぎ部屋の花嫁」は、彼女の作業着のうしろに亜麻糸を束ねた「花輪」をつけた。これには水をかけてやらねばならなかった。だから若者はうしろからおしっこをひっかける。それから彼女がスカートや下着を乾かす場合に、たびたび性的関係の機会が生まれたのである²⁰。

引用するのを憚らねばならない光景であるが、そうなるに当然、糸つむぎ部屋はほんらいの目的から離れた、みだらな集まりになったので、性や快楽を悪とときめつける「道学者」から目の敵にされた。こうして前述のように、教会や当局がこの風習をやめさせようと躍起になったが、それは決して根絶することができなかった。むしろ若者の両親や村の年配者たちは、その実態を知っていたにもかかわらず、糸つむぎ部屋を黙認していた。というのもそこは男女の出会いの場で、彼らも若いころ同じ経験をしてきたからである。それは村の共同体の再生産の役割を担っていたといえよう。

若者は将来の伴侶として、もともと勤勉な女性を求めており、それを

彼女の糸つむぎの作業から判断することもできた。したがって、場合によっては羽目をはずすこともあったが、村の若者たちにとって糸つむぎ部屋は、一種の社交の場であり、楽ではない農作業にも耐える、明日への活力を生み出す場でもあった。では以下において、糸つむぎ部屋の実態を、さらに具体的な資料において検証してみよう。

4 糸紡ぎ部屋のどんちゃん騒ぎ

ここに16世紀の1枚の銅版画が残っている。これはニュルンベルクの画家、バルテル・ベーハムが1524年に描いたものであるが、その後、この絵に描かれた人物にアルファベットのしるしを書き添えたビラがつくられた。このアルファベットは、銅版画を説明する『素晴らしい糸つむぎ部屋の一口話』（作者不詳）のためのものである。当時すでに活版印刷によって、一枚刷りの宗教説話、珍談、殺人事件など、人びとが興味を引きそうな内容のものが、売りさばかれていた。下に引用したのもその一種であるが、この銅版画は、当時における村の糸つむぎ部屋の姿を物語る、格好の資料であるといえる。



わが親愛なる読者の皆さん　ここで気に留めて
わが輩の語ろうとすることを　ちょっくら聞いてくだされ。
皆さんがこの目の前で　ご覧になっておるとおり
結構などんちゃん騒ぎのことをござる。
そいつはずっと以前に　糸つむぎ部屋で常になされておったし
これからも　おこなわれるものだ。
わが輩がこの絵で示したよりも
みなさんにゃ　もっと品よく
うまく立派に　出来たらおなぐさみ。
(わが輩がよく知っておるのだが)
これが実際　おこなわれていた姿をござる。
そこではちょっくら眠ったり　歌をも歌う。
ダンスをしたり　撥ねたりもする。
たがいにからかったり
キスをし　愛し合い　心を通わせる。
いささか殴ったり　投げ飛ばしたりもする。
ビールやワインを注ぎ
楽しく飲んで
そしてたがいに目配せをするってな具合をござる。

- A (図中の記号)：隣りのクントツがグレーテルとダンスをし
やがて彼のズボンがずり落ちる。
B：クラウスは彼女と踊って
外へずらかろうとするが　彼女は糸巻き棒を手放さぬ。
C：教会の雇われ女は運悪く
蕪と野菜をばらまいてしまう。
D：その機に乗じてハンスは
彼女を野菜の山の上へ押し倒そうとする。
E：わが輩が知ってのとおり　村長とこのマルタは倒れて足を
高く持ち上げる。
F：彼女がお尻を丸出しにしてもフリッツはその気にならず

あらぬ方を見ている。

G：村の村長は 身動きもせず

水桶のところに座り うたた寝をする。

H：堅物のフランツは バグパイプを持って

外に近いところに立ちつくす。

I：寒がり屋さんは ぶるぶる震え暖炉のところに立っている。

K：グレートったら 料理人に抱きつき やつにまだキスをして
いる。

L：むつつり男のクルトは 暖炉の隅っこへエルザともぐりこも
うとしている。

M：いたずら男の彫物師ファイトは クララのいやがることをし
ているので 彼女の手から糸巻き棒が落ちる。

N：マルグレートお婆さんはそのような行為が好きではない。

O：飲み助のフリッツは 美しい花輪をつけた花嫁と一緒に座り
ダンスはしない。

P：そこで花嫁と飲んでいるので
彼はいいやつだ。

Q：フリッツの義母がテーブルのところに座るが
もっと早く来ておれば 開けたてのワインが飲めたのに。

R：その夫であるぐうたらフランツは ぐったりとして
自分の足で立ってられない。

S：出歯ガメのディッツは 窓から中を覗いているが
仲間に加わりたいたのだ。

T：ひどい格好のゼーバルトは 抜け目のない男で
その姿を大目に見てもらおうとする。

V：そこへ彼の愛するバーバラが ちょうど松明で彼の姿を照ら
す。

W：シュトラウスはウルリヒの積極さに まんざらでもない。

X：その押しかけ女は 自分の明かりをすぐ消してしまう。

Y：ヒルトの母親のエリザベートは
このどんちゃん騒ぎを見て

思いにふける。

彼女もそうするのが常であった あの日 あの時のことをよく覚えているからだ。

彼女は楽しかった時代のことを思い出す。

Z：やくぎな 落ち着きのないハンスのやつは

ただ頭のなかで 何かを妄想し

家具職人のとこの娘ウルズラに

糸つむぎをまともにさせまいとする。

その際 おいしいワインを こぼしてしまう。

たっぷり入った大瓶だったのに。

哀れなやつったら 彼女をものにしようとするので

帽子がずり落ちる。

家具職人とこのウルズラは抵抗し

糸巻き棒で殴りかかる。

糸巻き棒の支えと錘がころがっていく。

こいつらが品のいい連中ではしょうかね。

奴さんらがどんなに 上品ぶろうとも

ほんとに下品でござろう？

村では上から下までそうだった。

だから連中は 朝であろうと晩であろうと

楽しくやって 自分の女と恋の炎を燃やし合っておるのだ。

吾が輩がいま 下男や女中 男と女について

ご覧に供した通りでござる。

糸つむぎ部屋では かかるしきたりがおこなわれておった。

では御免なすって 吾が輩の役目も終わりやしたから²¹。

これは村の共同体の中で繰り広げられていた下世話な世界であり、登場するのは固有名詞つきの村の顔見知りの人物ばかりである。ここでは糸つむぎはもはや口実にすぎず、飲み食い踊り、そして男女の社交の場と化している様子が描かれている。しかしよく見ると、乱交とかオルギア

ではなく、特定の相手との関係であることが分かる。時にはゆき過ぎもあったであろうが、彼らは彼らなりに、ルールの枠内での行動であったといえよう。とくに気に入らない相手の場合、女性が糸巻き棒で殴るのは当たり前であった。

この説明は、銅版画を売るために、都市市民が田舎の住民の野卑さをおもしろおかしく茶化したものである。そのためには興味を引く内容でなければならなかった。たしかにこれは糸つむぎ部屋の世界を誇張、戯画した面があるけれども、しかしある意味においては、民衆の生活の実態を示すものであったといえよう。

5 謝肉祭劇における糸つむぎ部屋

糸つむぎ部屋の実態については、さらにハンス・ザックスの『謝肉祭劇集』の『糸つむぎ部屋』に具体的に描かれている。彼はニュルンベルク生まれの有名な職匠詩人で、靴屋の親方の仕事の合間に多くの謝肉祭劇を書いているが、ここで採り上げる劇には、5人の人物が登場し、まず最初に百姓女が口上を述べる。すなわち糸つむぎ部屋に、村長をはじめ村の面々が集まり、朝まで踊り歌い、遊戯をして楽しくやるという。次に登場した百姓の下男は、すぐに彼女にこう言い寄る。

お晩でやす、グレート、もう来たただか。
ここでお前を見つけて
ほんに嬉しいだ。
おらお前に言い寄るぞ。
村中の
どの女子おなごより
お前がいちばん好きだ、ふんとだ²²。

この科白に対して、百姓女はかれを制してこういう。

とんでもねえ、キュンツェル、違うだ、
おらじゃねえ。言ってやるべえか、

知らねえだか、シュトリーゲルどんの娘っ子、
むきになるとこ見ると凶星だな。
言い寄るのはそっちにしろ。
寒くて窓に氷の花がきらきら咲いた時も
毎晩彼女の窓辺にたちつくし、
聖マルチン祭の夜には
財布の贈り物したではねえか。
ほれ、あっちへ行きな、お門違いよ。
いちばん好きだの、おらをものにしてえだの、
うめえことばかり言って²³。

贈り物は男性から女性にするのが通例で、女性が受けとれば、愛情を受け入れるしるしとされた。キュンツェルは、言い寄ろうとした百姓女グレートに贈り物の事実を暴露され、逆上して、彼女がヘンゼルと懇意であることを非難する。だから彼は、「お前なんか可愛くもなけりゃ金もねえ、猿といい勝負だ」とこき下ろす。この劇の導入部のやりとりからも、糸つむぎ部屋が男女の出会いの場であったことが明らかであろう。

さらに百姓とその妻が登場し、かれらの運勢を「ジプシー」に占ってもらう。「ジプシー」はエジプトから来た放浪者と誤解され、よそ者として差別された人びとであった。彼らはおよそ14-15世紀ごろ、ヨーロッパに侵入し、占いや小間物の小売、鋳掛け屋、馬喰などで生計を立てていた。ハンス・ザックスの住むニュルンベルクでも、当時、彼らは出現していたのであろう。とくに「ジプシー」占いは、よく当たるといふ評判があったので、信じるものも多かった。「ジプシー」はこういう。

おっ母さん、こりゃ何と腹黒い人だ。
牛乳盗っ人の、鬼ばばの
れっきとした魔女だ。
二十年も前に、生き埋めの刑になるほどの
大罪を犯している。

……

旦那に今夜ぶん撲られ、
こっそり旦那の金くすねて
金の入った壺を埋め、
司祭さんや助祭さんと
いい仲になるといふ卦がでておりますよ²⁴。

この科白に対して彼女は怒り、旦那も占ってもらえという。「ジプシー」は手相を見ながら、

あなたは酒好きの呑んだくれ、
……
賭博好きだが、いつも損ばかり、
つけで買っては金は払わず、
借金好きの、返済ざらい、
おまけに訴訟好きときてる、
だが、何よりかにより女好き、
そのうち父なし子を孕ませることでしょう²⁵。

「ジプシー」はそばにいた「女中」をも占うが、彼女も「仕事嫌いの怠け者」、
「父なし子」を生んだふしだらな女と決めつけられる。

タイトルは『糸つむぎ部屋』であるが、いうまでもなく、テーマは男女関係の揶揄である。これからも糸つむぎ部屋と性の問題が不可分であったことが分かる。謝肉祭劇は、もっぱら都市住民に対する娯楽劇であり、教会の拘束から離れたカーニヴァルの期間に演じられた。年一度のカーニヴァルの馬鹿騒ぎの余興として、人びとは謝肉祭劇や仮装行列などによって憂さを晴らした。登場人物は農民、司祭などが多く、これは都市住民にとって格好の笑いの対象であったからである。したがってハンス・ザックスの劇では、農民は愚鈍な田舎者として描かれ、さらにカトリック教会の司祭も好色で女性と関係を結ぶものとして、いつも槍玉にあげられている。いわば彼らは、カーニヴァルの道化役に仕立てあげられていたのである。しかしとくに教会批判が過ぎたので、作者ハン

ス・ザックスは当局から咎めを受け、この類いの創作をすることを禁じられている。いずれにしても、謝肉祭劇において、彼は民衆の最大の関心事をテーマにし、糸つむぎ部屋の実態を明らかにしているといえるであろう。

6 糸つむぎ部屋の歌

糸つむぎ部屋では、本来の作業のほかに音楽が好まれた。人びとは口と耳から歌を覚え、合唱や掛け合いをしたり、簡単な楽器による演奏をもおこなった。その内容は昔から歌い継がれてきた民謡、はやり歌、兵隊の歌、宗教歌などであるが、合唱は人びとの気持ちを高揚させ、陽気な雰囲気盛り上げる。さらに歌に合わせてダンスが繰り広げられることもあった。ダンスはこころを酔わせ、男女の仲を結びつける役割を果たしている。

さて歌のジャンルはいろいろあるが、中世のミネの伝統に根ざす、愛をテーマにしたものに人気があった。

いとしい人よ 冬になったね 部屋をほどよく暖めて
暖炉の向こうへお座り そしてほくを抱き締めておくれ
さすれば ねえ ほくもきみを抱き締めるよ
冬が寒かろうとも 愛があれば暖かい 愛
これさえあれば暖かい 愛 これさえあれば暖かい

いとしい人よ 冬になったね 谷と丘の上には
きみの素足のようによく白く
雪がずいぶん積もってる
聞いてごらん 小屋のまわりで
嵐がはげしく 笛吹く声を
谷や丘は すっかり雪景色

いとしい人よ つむいでいるんだね 蠟みたいな糸を
金色 銀色に ひかり輝く亜麻の糸

Mädchen, 's wird Winter



Mäd - che, 's wird Win - ter, mach's Stüb - che fein warm,



setz dich hin - tern O - fen und nimm mich in die Arm'!



Dann nehm' ich, Mäd - che, dich auch in die Arm',



friert's auch im Win - ter, die Lie - be macht warm, die, die



Lie - be macht warm, die, die Lie - be macht warm.

糸屑がきみのエプロンへ うまい具合に落ちている
糸つむぎ部屋のほくらには
冬の夜長も すぐ過ぎる²⁶

これからも、雪の積もった冬の夜、暖かい暖炉の部屋の中で、愛する人と糸つむぎをする2人の情景が浮かんでくる。若者は恋人のエプロンへ落ちる糸屑を払ってやる。この糸つむぎの共同作業は楽しく、彼らは時の経つのも忘れるひと時を過ごしている。

糸つむぎ部屋で歌われていた歌は、引用した楽譜からも分かるように、単純でリフレインが多く、覚え易いものばかりである。恋歌はさらに2人の情感の襲を歌い上げる。このような歌が多く残っているところを見ると、当時の人びとの興味の対象が奈辺にあったのかが分かる。たとえば『かわいいリースヒェン』の歌詞は、次のようである。

- 1 かわいいリースヒェンは たったひとりで
あそこのベッドで 眠ってる
部屋は開いたままになっていた
おいらはそっと入り込み
ベッドへ向かって
抜き足 差し足 忍び足
あの娘の眠りを 覚まさぬように
あの娘の眠りを 覚まさぬように

- 2 「誰なの わたしを抱き締めるのは わたしにキスをするの
は誰？
どうしたのかしら
ドアを閉めるのを 忘れたのかしら
ねえ あなたはどなた
すぐに名乗ってよ
そうでないと 母さん呼ぶわよ
わたしにひどいことをするって
わたしにひどいことをするって」

- 3 「かわい娘ちゃん 静かにしてよ
家のみんなは眠ってる
親父さんもおふくろさんも
寄り合いから帰ってきたが
冷たい赤ワインのせいで
すっかり酔っぱらってた」
「どうしてあなたは わたしのベッドの前で突っ立ってるの
ベッドに入ってよ さあ ベッドに入ってよ」²⁷

これは1番を男性が歌い、2番を女性が、3番の前半を男性が、後半を女性が歌うという構成になっている。男女の掛け合いによって、歌詞の情景はよりリアリティを増す。引用した歌詞の内容も分かりやすく、

Jungfer Lieschen schläft droben



Jung - fer Lies - chen schläft dro - ben im Bett - chen al - lein, die
Kam - mer stand of - fen, und ich schlich mich hin - ein. Und ich
schlich mich vor das Bett - chen, und ich schlich mich fein
sacht, auf daß das Jung - fer Lies - chen nicht vom
Schla - fe er - wacht, vom Schlaf er - wacht.

受け身の女性も最後には積極性を示しており、とくに彼女の科白が一種の落ちとなっている。ヨーロッパにおいて、夜、思いを寄せる女性を尋ねる風習は、多くの文学や音楽にも認められるが、たとえば『ラプンツェル』において、塔に閉じ込められたラプンツェルのところに、王子が尋ねてきてよじ登る。また恋人が寝ている窓の下で奏でるセレナーデなども、その一端を示すものである。しかしそれは文学や音楽のみの世界ではなく、現実に広くおこなわれていた風習であった。彼女の部屋の窓までよじ登っていくとき、できるだけ危険な方法をとるのが、愛の深さを示す基準とされた。気に入った男性をベッドに入れる、日本の「夜ばい」に似た習慣（ドイツ語では *probe Nächte, Kiltgang* など）²⁸も、南ドイツやシュレーゲエンの各地で報告されている。

次に引用する歌は、さらにエロティックな内容で、民衆の素朴な性的

関心をかき立てる内容になっている。この種の歌は、文学作品としては
際物とされ、従来、排除されてきた。

アレクシスはかわいい娘と
サンザシの茂みの木陰に 座っていた
ふたりはヒエン草だけで
花籠を編んでいた
その他のことは その他のことは
何にもいえやしない（繰り返し）

欲情したように 官能の眼差しが
彼女の目から光る
それが彼の心に ささやきかけているようだった
「ああ わたしに一度口づけしてよ」って
その他のことは その他のことは
何にもいえやしない

有頂天になった
アレクシスは
腕を彼女に巻きつける
薄物の下から 胸と膝がはだける
その他の その他の
何をさらけることが できようか

若者が手荒なことをしたので
かわいい娘はあらがった
声を上げたが、そっと小声で
「どけてよ どけてよ そのお手々」
その他のことは その他のことは
何にもいえやしない

どんなに足搔いて みたとても
膝の間に手が伸びる
彼女はいった 「ああ もうだめだわ
ひどく罪なことをする人ね」
その他のことは その他のことは
それ以上 どんなひどいことができようか

ふたりは座って 戯れた
官能の嵐が過ぎるまで
切なく 手に手を取って
たがいに見つめてた
その他のことは その他のことは
言葉には できやしない

彼女は彼よりも
はるかに早く 微睡眠から目を覚ます
彼を見つめて
「もうキスをしてくれないの」といった
キス以外に何がある
その他に何も その他に何もありやしない

「アレクシス あなただけよ」と
かわいい娘は ささやいた
「泣いたりなんか しないわ
これから先も キスをしてくれるなら」
その他のことは その他のことは
言葉には できやしない

きみたち娘さん 彼女のような
馬鹿なまねはおよし
初めから 彼女は馬鹿だった

あのとき 彼女は胸と膝をあらわにしたんだから
その他のことは その他のことは
何をあらわにできたであろうか²⁹

人目を避けた男女の逢い引きの描写であるが、この歌は女性が最初、積極的な挑発をおこなっている。このようなきわどい表現は、みんなの興味の的であった。ただ最後の節は、これまた一種の落ちであって、教訓めいた話になっている。

がんらい、多くの既婚女性は、夜、家にいて家事や子供の世話をするのが一般的であったので、糸つむぎ部屋は独身の娘さんの集まるところとされていた。部屋を提供した家では、両親や年寄りはずいぶん早めに眠るようにしている。しかしここは独身の男女の出会いの場だけではなかった。実際の数では分からぬが、既婚者が出入りすることもあった。しかし独身者たちにとって、既婚者たちは目障りな存在である。次の歌もその一端を示すものであろう。

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
だって あんたの亭主が病気だからさ」
「あの人病気なら 病気でいいわ
暖炉の前の腰掛けにでも 寝かせておいてよ
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
だって あんたの亭主が重体なんだから」
「重体なら 重体でいいわ
あたしにゃ ちょうど都合っていうところよ
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
だって あんたの亭主が死んだんだから」
「死んだんなら 死んだでいいわ

やっかい払いができたんだから
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
だって運び屋さんが あんたの家に来ているよ」
「運び屋さんが家に来りゃ
やっかいものを運んでくれるってもんよ
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

……

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
もう旦那を運び出しちゃったよ」
「運んでいったら いったで結構よ
適当なところへ 運んでいけばいい
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
もうみんなで旦那を埋めちゃったよ」
「埋めちゃったら 埋めちゃったでいい
苦しいことから おさらばだから
あたしゃ 家には帰らない あたしゃ 家には帰らない」

「おかみさん 家に帰らなくっちゃ
求婚者たちが家に来ているよ
「求婚者たちが来ているなんて
そりゃ大変 だあれも帰しちゃならないわ
すぐに家へ帰らなくちゃ すぐに家へ帰らなくちゃ」³⁰

これは糸つむぎ部屋でうつつをぬかし、遊びほうけているおかみさんを
茶化したものであるが、歌の文句は対話形式になっており、男性と女性

が役割をきめて掛け合いで、おもしろおかしく歌ったものであろう。歌う側とそれを聞く側のやり取りや、合いの手を入れる光景が浮かんでくるが、これからもユーモアに富んだ民衆の心性を感じ取ることができる。このように、とくにおかみさんたちが檜玉に挙げられ、謝肉祭劇でも糸つむぎ部屋「狂い」の女房を嘆く亭主がテーマになっている。

糸つむぎ部屋の歌は、ほとんど口から口へと伝えられてきたが、それが収録されたのは、糸つむぎ部屋の習俗が衰退した19世紀末であった。オットー・ベッケルが1885年に歌を集めて出版しているが³¹、注目すべきことにその後間もなく、1896年にドイツにおいてヴァンダーフォーゲル運動が始まっている。この運動はたしかに「学生組合」の伝統に根ざし、それに参加した若者たちの多くは学生であり、農民ではない。しかしその運動における、郷土性、自然への回帰、民謡や祭りへの愛着という特性は、糸つむぎ部屋の歌をも受容する側面があった。折しもそれは出版されて、都市の住民や学生の目に留まっている。こうして農民たちが歌った歌の一部が、ヴァンダーフォーゲル運動の歌へ流入するのである。

7 肝だめし

農村の若者にとって称賛されたのは、勇気であった。そのために各種の肝だめしがおこなわれた。たとえば「深夜に墓地へゆく」とか、「納骨堂から骨や頭蓋骨を取ってきた」り、「新墓から十字架を取ってくる」³²といったものである。彼らはみんなにその武勇伝を自慢し、臆病者を馬鹿にした。また臆病風に吹かれたものも、それを隠して勇気を振り絞り、男としての意地を張り合った。

さて、糸つむぎ部屋の集まりが終わりになるころ、魔女、悪魔、狼人間、帰ってきた死者など、人びとが怖がる話をした。その中でとくに好まれた話は、『猫の洗礼』であった。

もうおよそ真夜中になっていた。女の子たちは糸巻き棒をかたづけ、編み物をいっしょにまとめようとしていた。そのとき同行していた若者のひとりが、猫を洗礼しようと思いついた。若者や娘たちが笑

う中、「猫に洗礼を施す者」がどこかへゆき、それから間もなくして、1匹の猫を両手でかかえて帰ってきた。たっぷりもったいぶって、その男はきよとんとしている動物をテーブルに載せ、教会の洗礼を施す言葉をしゃべり始めた。

そうするや否や、窓をたたく音がして、外から声が聞こえてきた。「猫に洗礼を施した者よ、こっちへ来い！」だれもそうするものはいなかった。すると窓をたたく音と要請が繰り返された。糸つむぎ部屋に集まった連中は怖くなり、困惑して顔を見合わせた。そうこうするうちに、3度目のノックの響きと叫び声があった。連中の体の中をまぎれもない恐怖が駆け抜け、彼らは自分たちの身に不幸が降りかかるのを恐れた。みんなは両手両足をばたつかせて抗う「洗礼を施した者」を、ドアから外へ押し出した。するとすぐぞっとするような叫び声が聞こえてきた。不安に駆られたものたちが、その原因を見ようとしてためらったが、結局、そうして家の前へ出てみると、もはやだれひとり見当たらなかった³³。

このような怪談は、糸つむぎ部屋の終了時に語ることに、大きな意味があった。すなわち、妖怪、悪魔、魔女、各種伝説、俗信の類いが本気で信じられていた時代のことである。得体の知れないものに対する人びとの恐怖心たるや、現代とは比較にならないほど大きかった。話を聞いて怖くなった女の子は、帰路に男性の同行を求めることが多かった。これが若者たちの狙いであり、こうして彼らは頼もしさと勇気を示すチャンスをつくり出したのである。

また糸つむぎ部屋の終了時には、もうひとつの「儀式」をする場合があった。各地によって異なるが、キスの事例が多い。ヘルスフェルト地方では直接のそれではなく、ハンカチやベール越しでおこなったし、両方の頬というものもある。オーバーロスフェでは、娘たちは「居合わせた若者たちみんなに、キスをしなければならず、各人はこの機会に15回から20回の結構なキスをしてもらった」³⁴という。

こうして恐怖心と男女の浮き浮きした気持ちが入り交じり、彼らは帰路についた。いうまでもなく、当時の夜道は月明かりがなければ、真の

暗闇である。意中の女性がいれば、糸つむぎ部屋の連中の目も両親の目も気にすることのない、2人だけの機会に恵まれるということになる。うまくゆけば彼は、夜道の中で、「官能的に興奮した女の子によって、彼の願望のすべてがかなえられ」³⁵することもあった。

ちなみに、糸つむぎ部屋の終了時間の決まりは、およそ夜9時から10時であった。しかし実際には、平日では真夜中、週末には朝方の4時-5時、あるいは夜が明けて日が昇るころまでの事例も、報告されている。糸つむぎの作業をこれほど長時間おこなったとは思えない。いうまでもなく、それ以外の目的であったのは、推して知るべきであろう。

8 タブーと違反

糸つむぎ部屋はたしかに、男女の出会いの場であったが、しかしいつもどんちゃん騒ぎになったわけではなかった。農村には農村なりのしきたりやルールがあった。糸つむぎ部屋の主役は、独身の若者と娘であり、既婚の女性は、夜にも家事などがあったので、前述のように顔を出すことは少なかった。既婚の男性が出席したとしても、日常生活の情報交換が中心であった。したがって糸つむぎ部屋のどんちゃん騒ぎの報告の中には、先に触れたように田舎者を茶化すために、村以外の人が見聞したものとそれに想像力を加えて誇張したものがあったということも、見過ごしてはならない。

一般には糸つむぎ部屋で独身の男女が知り合っても、たてまえはグループ内での顔合わせのみが許され、個人交際はタブーとされていた。農村共同体の風紀や秩序は、おもに独身の若者たちが規制しており、タブーをつくって結婚相手となるべき独身女性をみんなで監視していた。また縄張り意識が強く、とくに村以外のものに対しては、ずいぶん警戒をしている。他の村の若者が入り込んでくると、乱闘騒ぎになった。さらに他の村の若者が自分の村の娘を嫁にすることは、村の若者の面子にかかわることとみなされている。娘の方も、相手の素性或性格が分かってから行動するのが常だった。もし意中の人ができれば、村人の目をはばかり、人目を避けて逢引きする必要があった。その後、2人の親同士が話し合い、婚約、結婚という手順を踏んでいる。

しかし一般には、結婚相手は愛情からではなく親同士が決める場合が多く認められる。とくに財産や家と家との関係が優先して、娘は意に反して結婚せざるを得ないことも、日常茶飯であった。いずれにしても、婚約が成立すれば、2人の仲は公然と容認され、もはやだれの目もはばかることはなかった。その期間は40日であったが、ただし、当時、キリスト教の道徳観が深く浸透していたので、結婚まで性的関係を結ばなかったケースも比較的多かったことは事実である。

ところが、都市のギルドの職人と田舎の農民では、性道徳について大きな意識の違いがあった。都市の職人は性を厳しく規制され、原則として結婚は許されていなかった。親方になるとようやく妻帯できたが、正式の結婚後に子供を設けなければ、親方の権利を剥奪された。それに対し、農民の場合、婚約者同士であれば、夜の訪問は大目に見られていたし、婚前交渉をしても、後に結婚すればそれほど問題になることはなかった。民衆史には、農民の私生児は少なく、むしろ婚前妊娠の後、結婚というデータがかなりある。ただし、つきあっていた女性が妊娠した場合、男性は結婚を逃れることはできなかった。そうしなければ男性は不誠実かつ不名誉な男として仲間外れにされたり、嘲笑や「シャリヴァリ」(共同体による制裁)を受けた。むしろその男性は、村ではもはや結婚することができなかった。また乱交をする女性に対するの制裁もあり、彼女の家の前には、「わいせつなシンボルが飾りつけられ」た。したがって大部分の人びとは、タブーを守っていたといえよう。

だが、いうまでもなく以上のような事例ばかりではない。糸つむぎ部屋の風習は、当然のことながら結婚以外の男女関係の一因ともなった。たとえば、糸つむぎ部屋で歌われた『ヘッセンの農夫』という歌には、姦通に対する人びとの深層心理が認められる。

ヘッセンの農夫にや きれいなかみさんがいる
その上 かわいい手伝いさんも
農夫は彼女に いかれてた
でも今はだめ も少し先にのぼして
ゆっくり ゆっくり

でも上手にね（繰り返し）

かみさんが年の市に出かけると
農夫は有頂天
かわいい手伝い 連れ込んで
藁のベッドの上へ
押し倒し 押し倒し
ゆっくり ゆっくり
でも上手にね（繰り返し）

おかみさん 年の市から帰ってきて
階段を駆け登る
するとかわいい手伝いが 横たわり
その上に 旦那がいるではないか
押しのけ 押しのけ
ゆっくり ゆっくり
でも上手にね（繰り返し）

かみさん 亭主にこういった
「あたしにだって 言い分があるわ
あんたが手伝いとしたんなら
わたしは作男を愛するわ！」
押しかけ 押しかけ
ゆっくり ゆっくり
でも上手にね（繰り返し）³⁶

……

ここからも分かるように、近代においても農家には「女中」や「作男」という奉公人を抱えた所帯がかなりあった。一般に奉公人たちは結婚できないことが多く、その意味からも農村共同体は、本質的に性的問題の発生要因をもっていた。

南ドイツの山岳地方では、性的には比較的寛容な風土があり、「糸つむぎ部屋の口説き」という言葉が残っている。これは村の司祭の口調をまねていたが、内容はみだらな性的内容であった。また糸つむぎ部屋の季節の後、9か月して生まれた子供を、「糸つむぎ部屋の子供」³⁷といい、父親は2人以上の可能性があるとわさされていた。さらに16世紀から18世紀にかけて、犯罪記録の中には姦通、未婚の母などの事例もかなりあり、果てには嬰兒殺しの悲劇も認められる。それは糸つむぎ部屋の習慣のみに帰せられるものではないが、タブーを無視した、民衆の奔放な性行動の一面を示すものであるといえる。これらの中で、とくにひんぱんに発生したのは猥褻行為と婚姻外性交、いわゆる姦通であった。その罰としては、北ドイツの方が厳しく、都市部では斬首や極刑の車輪の刑もかなりあったが、南ドイツでは比較的穏やかな刑が一般的である。一例を示すと次のようであった。

通常、罰金刑が科せられたけれども、特別な場合にはさらし台の刑が実施され、さらに教会への日参、巡礼、あるいはとくに女性が、髪をふりほだき、若枝の鞭やろうそくを手にして素足で教会の前に立ったりする、教会刑罰などもあった³⁸。

犯罪者は「権利のないもの」として、社会的制裁を受けた。とくに名誉が重んじられた社会においては、さらし者になることだけでも、屈辱的なことであった。ここには犯罪者をさらし者にして、教会の道德律に組み込もうとする意図がみうけられる。

以下に引用するのは、1600年から約50年間のバイエルン大公国の性犯罪の件数のみを抜粋したものである³⁹。当時人口90万人の統計であるが、残念ながら農村部のみの犯罪のデータはない。

全犯罪統計の引用は省略したが、それと比較しても、猥褻行為の比率が15.6%でトップを占めている。ついで窃盗の15.1%、殺人の9.0%、姦通の6.2%と続く。その意味から、猥褻行為や姦通という性犯罪は、当時、かなり比率が高かったといえる。これは記録にあらわれた数字であり、とくに田舎では性犯罪を表面化させず、穏便に処理していたという

	男性	女性	合計	全犯罪に占めるパーセント
強姦	5	0	5	0,3
獣姦	3	0	3	0,2
男色	9	0	9	0,6
近親相姦	20	19	39	2,5
重婚	2	1	3	0,2
姦通	64	32	96	6,2
猥褻行為	87	154	241	15,6
内縁	0	31	31	2,0
売春仲介	0	3	3	0,2
不品行	11	2	13	0,8

傾向があった。いずれにしても、キリスト教の道徳的規範とその逸脱の問題は、民衆の風俗と表裏一体をなしており、その意味において、これは糸つむぎ部屋をめぐる問題に関係してくるのである。

9 教会と当局による糸つむぎ部屋の禁止

筆者の手元の資料では、ヘッセン地方において糸つむぎ部屋の禁止令が出されたのは1577年であった。それによると「糸つむぎ部屋やすべての秘密の場所」⁴⁰にかかわると、5グルデンの罰金を科せられている。ヴェルテンベルクのヘルリンゲン村では、1587年に同じく禁止令が出され、「糸つむぎ部屋を提供した家長は、1グルデン30クロイツァーの罰金、若者は水とパンのみで塔に2日間監禁、娘はさらし者の刑に処された」⁴¹。またヘッセンに戻るが、当地では1602年、1615年、1676年と禁止令が出されている。16-17世紀においては、禁止の力点は男女の不道徳的な会合に置かれ、男性の参加がご法度になっている。さらに1726年の2月1日に通達された、ヘッセン国規定の「不道徳な会合禁止」令第13条は次のようである。

当地の聖俗の当局は、若者たちの良からぬ会合と集まりのいかなるものであろうとも、許可せざるものなり。したがってときおりまだ認められる、いわゆる糸つむぎ部屋では、夜、女たちが糸つむぎ車を持ってやってきて、男たちも彼女らと同席しているのであるが、これは連中の両親や家長の仕事をサボり、その反面、勝手気ままなこと仕出かしておるので、一掃されねばならぬし、さらに自分の家屋の中にかかる会合を容認するものも、そこへ足を運ぶやから共々、直ちに厳罰に処せられ、いかなる場合でも有罪なり⁴²。

当局や教会はさらに何度も、「不道德な会合の禁止」の通達を出しているが、しかし糸つむぎ部屋の慣習は、村の生活の中に深く浸透していたので、前述のように禁止令は効果がなかった。とくに農村において、独身では農作業が円滑におこなえず、結婚が農業生産のうえでも重視された。つまり嫁取り、婿取りは、跡継ぎを得るためのみならず、貴重な農村労働力の確保であり、さらに村の結束力を強めることを意味していた。村に結婚式があると、村人のほとんどが駆けつけ、何日も宴会をして祝った。だからその前提として、両親も村人も糸つむぎ部屋における男女の出会いを黙認する傾向が強かったといえよう。黙認にはさらに村の事情もあった。村の若者や娘が他の村へ転出してゆくと、「入村金」を払わなければならなかったからである。

糸つむぎ部屋をめぐる農民と当局（教会）の摩擦は、結局、農村共同体の自治と「公権力」との対立であった。農村には前述のような共同体の事情があったので、当局や教会が上から押さえつけようとしても、この習俗を村から根絶させることはできなかつたのは、当然であったといえよう。当局としても教会側からの要請によって動いていた節があり、革命の高揚期は別として、不穏な反政府運動に発展する可能性の少なかった糸つむぎ部屋に対して、それほど徹底して弾圧をおこなっていない。だから後には当局も全面的な禁止ではなく、会合に条件をつけるようになった。たとえばヘッセン大公国の当局は、1812年12月31日に次のような通達を出している。なお「おおよけの糸つむぎ部屋」とは、家庭内でおこなわれる糸つむぎの作業と区別するための用語である。

- (1) これからは役人の特別な許可なくして、家主やいかなる他の人物といえども、糸つむぎ部屋に、連中の要請に応じて好きなように、部屋、火、明かりを提供したり、居合わせるというような、かかるおおやけの糸つむぎ部屋を開くことはまかりならぬ。
- (2) それに違反した家主は、罰金として10ライヒスターラー、その部屋にいたものは1ライヒスターラー支払い、または役人の判断によって、地区あるいは管区監獄にて24時間の禁固刑に処せられるものなり。
- (3) かかる会合が当地の事情に鑑み、ふさわしいと確証できる場合にかぎり、役人はおおやけの糸つむぎ部屋に加わる許可を与えるものなり。
- (4) ふだんに家族あるいは下男や女中を有する家長と主婦は、糸つむぎのために集まろうとする異性でない隣人や知人たちなら、当家に入る許可を与えること可なり。
- (5) 必要な仕事にいそしむためのかかる集まりに、道徳にかなった団欒と許可された催しに抵触する意図が、どんなにわずかでもあるならば、警察の風紀係は、それが道徳的退廢のきっかけになることを、決して許さざるものなり。おおやけの糸つむぎ部屋の作業を許可された家長、主婦、あるいはその当事者は、この集まりの際に不道徳な歌が歌われないこと、品行方正な付き合いに反する会話や行動がなされないこと、サイコロやカード遊びをしないこと、宴会をしてアルコール類を飲まないことなどを、責任をもってまっとうしなければならぬ。
- (6) おおやけの糸つむぎ部屋の作業を許可された家長、主婦、あるいはその当事者は、この規定に違反すれば、当局によって状況に応じて定められた刑に処せられるものなり。……
- (7) 村長ならびにその役割をはたす名士は、上記の規定に違反がなきよう、監視せねばならぬ。したがって彼らは、この事案に必要な注意を注ぎ、法令違反がありうる場合には、ただちに警察当局へ処罰の告発をしなければならぬ。
- (8) なお、現行の規定をたえず新たに思い出させるために、役人は

毎年、糸つむぎが始まる時期の前に配下の住民に、これを周知させる配慮をしなければならぬ⁴³。

ここからも当局がかなり譲歩していることが理解できよう。それには歴史的な背景もあった。キリスト教の中で、糸つむぎ部屋の習俗をもっとも強く批判をしたのは、カルヴァン派であった。とくに初期カルヴァン派は、16世紀以来、「不道德な」糸つむぎ部屋を槍玉に挙げた⁴⁴。その影響によってルター派やカトリックにしても、これを黙認することができなかった。しかし啓蒙主義や自由主義、フランス革命、さらにはブルジョワの台頭などによって、19世紀になると厳格なキリスト教の道德の規範は揺らぎ、一方的に押さえ込むことができなくなったのである。さらにやっかいなことに、糸つむぎ部屋は夜開かれる。当局は四六時中、いつも村を監視することができず、上の規定においても、村長およびその他の人にそれを委託しなければならない状況があった。したがって村長を含め、村ぐるみで黙認すれば、規定は有名無実になってしまったのである。

10 民衆文化としての糸つむぎ部屋

糸つむぎ部屋の特徴としては、糸つむぎという労働と、それを口実にした気晴らしという両面があった。後者は非日常的な祭りの要素をも包括している。ここにきわめて素朴にかたちではあるが、農民たちの生活の文化が形成されていたといえよう。すでに社会学や民俗学では、日常と非日常という、はっきりとした区分において、祭りの役割が考察されてきた。すなわち祭りは、日常生活システムや社会の体制の枠を越える別世界をつくりだす。この非日常性の世界の中で、民衆は酒に酔い、ダンスに興じ、日ごろの憂さを晴らして、溜まった根源的なエネルギーを発散する。カトリック世界におけるカーニヴァル、年の市、フランスのシャリヴァリなどもその一例である。さらに「阿呆船」や「死の舞踏」も、現世から離れる一種の民俗学的な祭りとして位置づけられよう。

祭りはいわば体制の安全弁でもあった。しかし当局のコントロールが効かなくなれば、多くの場合、祭りは禁止されている。ドイツにおいて

も、ニュルンベルクのシェーンバルト祭は、教会の圧力によって中止されてしまった。糸つむぎ部屋の習俗には、日常性と祭りの両側面があったが、後者の傾向が強まり、社会規範の枠をはみ出すおそれがでてくると、統制の対象になっている。その意味において糸つむぎ部屋は、このような祭りの原初的な系譜に位置づけることができるであろう。

さて、都市市民や教養階級の集いについては、すでに多くの研究がなされてきた。たとえば、ギルドの組織、兄弟団、信心会、読書協会、サロン、フリーメイソン、カフェハウスなどは、中世から近代にかけて職能的、宗教的、社会的共同体や結社として、ヨーロッパ文化の形成に大きな役割を果たしてきた。さらに、近代における啓蒙主義の恩恵を受け、これらの一部は、政治結社にも発展してゆく。フランス革命時のジャコバン・クラブなどは、その初期の例であり、これらの政治結社が王政から共和制の移行の原動力になったことは周知のとおりである。

しかし都市部の共同体や結社に比べて、ヨーロッパの人口の大部分(中世では90パーセント)を占めていた農村部において、人びとがどのような社会生活を送っていたのかは、ほとんど知られていなかった。しかしいうまでもなく、封建体制やその遺制を底辺部において支えていた農村にも、人と人を結びつけていた共同体が存在していた。とくにそれを必要としたのは、家の新築、収穫の手伝い、農機具、農耕用家畜の貸し借り、火事に対する消火の義務、冠婚葬祭として、誕生、洗礼、結婚式、葬式、祭りなどの場合である。「隣人との良き人間関係」⁴⁵が、円滑な共同体生活を支えるバックボーンであった。こうして農村にも共同作業のあとの飲食の集い、若者組などの集まりや、糸つむぎ部屋が存在していた。このような原初的な民衆の習俗は、キリスト教や封建体制よりも起源は古く、より民衆の生活に根ざしたものであった。

民衆の習俗は、一見するとキリスト教や領主の「権力」と共存関係にあるように思える。しかし、実際にはそうではなかった。たとえば結婚式は、すでに13世紀ごろから私的におこなうことが禁じられ、かならず教会を通じて挙げなければならないとされている。またアウクスブルクの宗教和議(1555年)によって、領主の信じる宗派が臣民の宗派にされた。さらに賦役や納税も容赦なく農民に押しつけられている。したがっ

てヨーロッパの歴史は、一面において農村および都市の共同体・自治組織と、キリスト教や国王・領主による「公権力」との軋轢の歴史であったといっても過言ではない。糸つむぎ部屋に対する教会と当局の介入も、農村共同体の在り方と宗教的・世俗的権力との緊張関係という視点からとらえるべきであろう。一般的には「公権力」は、これらの共同体・自治組織を支配体制の中に組み込んで巧妙に統治している。たとえば村長やその他の有力者に村の下級裁判権や末端の統治権が付与され、村の統治と治安の維持がはかられてきた。

けれどもその体制は、必ずしも絶対的なものではなかった。たとえば糸つむぎ部屋の習俗でも理解できるように、農民たちは表面では権力に柔順であるようにふるまっても、裏ではしたたかな農民根性を発揮することもあった。糸つむぎ部屋は、人間の根源的な性の部分にかかわるものであったので、「権力」で一方的に押さえ込むことができなかったのである。さらに、農村共同体が宗教的・世俗的権力に対抗して連帯すると、「公権力」をも脅かす底力をもっていた。ドイツ農民戦争の事例がそれを如実に示している。彼らは村の共同体が牧師の選出権をもつこと、十分の一税の廃止、賦役の軽減など、12か条の要求を掲げて蜂起し、体制の根幹を揺り動かした⁴⁶。同様にして、都市の共同体や結社が「公権力」と対立し、反乱や革命を引き起こす原動力になったことも、周知の事実である。

ところが糸つむぎの習俗は、「公権力」によってではなく、社会構造の変化によって消滅したといえる。すなわち糸つむぎの作業は、産業革命とともに製糸工場でおこなわれるようになり、このような家内の手工業は衰退していった。ドイツの産業革命は、先進のイギリスやそれに続いたフランスより遅れ、1830年代より始まり、19世紀後半に進展しているが、この産業構造の変化によって、ドイツでも村から都市へ若者が流出し、村の共同体は弱体化してしまった。世の中全体が、いわゆるゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ移行していったので、閉鎖的な農村共同体が崩れた。さらに交通や通信が発達すると、男女の出会いの可能性がはるかに拡大した。その結果、糸つむぎ部屋の風習はしだいに無くなり、20世紀初頭にはドイツでも歴史の闇に消えていったのである。

この村の習俗は、その後、ほとんど学問研究の対象ともされずに、すっかり忘れ去られていた。しかしこの分野の研究は、ヨーロッパにおいて民俗学的・社会学的・文化人類学的なアプローチが試みられるようになってから、次第にクローズアップされ始めている。すなわち、一流の思想、哲学、文学、音楽などの研究だけではなく、これらの「上澄みの文化」を根っこ部分において支えた民衆文化の重要性が、最近、ようやく見直されてきたからである。筆者もとくにドイツの民俗学的・社会学的な研究に刺激を受け、このテーマに取り組んでみた。ただし、誤解のないように申し添えておが、決して下世話な興味から拙論を草したのではなく、底辺の民衆文化を掘り起こそうとした真意を理解していただきたい。

本稿はささやかな試論であるが、これによってわが国ではじめて、糸つむぎ部屋の習俗の概要を紹介することができたものと思われる。この習俗とのかかわりから見れば、冒頭で述べた「眠り姫」の糸つむぎ棒の謎も氷解し、『いばら姫』において国王が国中の糸つむぎの道具を廃棄させた理由が十分理解できたであろう。さらにゲーテの『ファウスト』におけるグレートヒェンの糸つむぎの場面の奥深い意味を感じ取ることができ、『糸をつむぐ娘』の詩の背後に秘められた世界にも、想いを馳せることができよう。したがって、いわゆる「上澄みのヨーロッパ文化」のみならず、底辺の民衆の生活をも視線を向け、それをを含めた総体として、「ヨーロッパ文化」を把握することが肝要であると考え。

[付記] 本稿は平成9年度学部共同研究費の貸与による研究成果の報告である。ここに記して、学校法人関西大学に謝意を表したい。

注

- 1 Henkhaus, Uwe : Das Treibhaus der Unsittlichkeit, Marburg 1991, S. 10.
- 2 Vgl. Brüder Grimm : Kinder - und Hausmärchen, München 1996, Bd. 1, S. 134.
- 3 Vgl. Bolte, Johannes u. Polivka, Georg : Anmerkungen zu den Kinder - und Hausmärchen der Brüder Grimm, Hildesheim 1982, Bd. 1, S. 434ff.

- 4 Ibid., S. 436.
- 5 Vgl. *ibid.*, S. 436ff.
- 6 Vgl. Basile, Giambattista : *Der Pentamerone*, Hildesheim 1973, S. 195ff.
- 7 『ペロ－童話集』新倉朗子訳, 岩波文庫 東京, 157ページ以下参照.
- 8 Vgl. Brüder Grimm, a. a. O., S. 249.
- 9 Vgl. Fetscher, Iring : *Wer hat Dornröschen weggeküßt?*, Frankfurt am Main 1992, S. 174.
- 10 Fielhauer, Hannelore : *Schlüssel und Schlösser*, Wien 1987, S. 52.
- 11 『ゲーテ』手塚富雄・他訳 中央公論社 1966年 504ページ.
- 12 Goethe, Johann Wolfgang von : *Sämtliche Gedichte*, hrsg. von Ernst Beutler, Zürich 1949, Bd. 1, S. 127.
- 13 Vgl. Medick, Hans : *Spinnstube auf dem Dorf*, in *Brauchforschung*, hrsg. von Martin, Scharfe, Darmstadt 1991, S. 380f. Henkhaus, Uwe, a. a. O., S. 33ff.
- 14 Bornemann, Ernst : *Sex im Volksmund*, Hamburg 1974, Bd. 2, Art. 53. 3.
- 15 Vgl. Heise, Ulla : *Kaffee und Kaffeehaus*, Leipzig 1996, S. 42ff.
- 16 Fuchs, Eduard : *Illustrierte Sittengeschichte*, Frankfurt am Main 1988, Bd. 2, S. 135.
- 17 *Ibid.*, S. 137.
- 18 Fetscher, Iring, a. a. O., S. 174.
- 19 Bornemann, Ernst, a. a. O., Bd. 2, Art. 53. 3.
- 20 *Ibid.*, Bd. 1, Art. Brechelbusch.
- 21 Fuchs, Eduard, a. a. O., S. 136.
- 22 『ハンス・ザックス謝肉祭劇全集』藤代幸一・他訳, 高科書店 1994年 114ページ以下.
- 23 同上書, 115ページ.
- 24 同上書, 117ページ.
- 25 同上書, 117ページ.
- 26 Henkhaus, Uwe, a. a. O., S. 84.
- 27 *Ibid.*, S. 202.
- 28 Vgl. Bornemann, Ernst, a. a. O., Art. 14. 29.
- 29 Henkhaus, Uwe, a. a. O., S. 212f.
- 30 *Ibid.*, S. 196f.
- 31 Vgl. *ibid.*, S. 174.
- 32 *Ibid.*, S. 94.

- 33 Ibid., S. 95.
- 34 Vgl. *ibid.*, S. 87.
- 35 Ibid., S. 96.
- 36 Ibid., S. 208f.
- 37 Bornemann, Ernst, a. a. O., Bd. 1, Art. Brechelstube.
- 38 Dülmen, van Richard : Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit, München 1992, Bd. 2, S. 266.
- 39 Ulbricht, Otto (Hrsg.) : Von Huren und Rabenmüttern, Köln 1995, S. 65.
- 40 Henkhaus, Uwe, a. a. O., S. 134.
- 41 Medick, Hans, a. a. O., S. 389.
- 42 Henkhaus, Uwe, a. a. O., S. 135
- 43 Ibid., S. 140f.
- 44 Vgl. *ibid.*, S. 133.
- 45 Vgl. Rösener, Werner : Bauern im Mittelalter, München 1985, S. 155ff.
- 46 Vgl. Deutsche Literatur, Eine Sozialgeschichte, hrsg. von Reinbek A. Glaser, Hamburg 1991, S. 356.

Eine Sittengeschichte der Spinnstube

Takashi Hamamoto

Von alters her war das Spinnen für die wichtigste Arbeit der Frauen gehalten worden. Wenn ein Mädchen gut spinnen kann, wird es eine gute Hausfrau, so sagte man. Das Spinnen stand also in Verbindung mit der Ehe oder dem Schicksal der Frauen, und die Mutter brachte der Tochter zu erzieherischem Zweck das Spinnen bei. Es wurde von Mund zu Mund unter Frauen überliefert. In diesem Sinne thematisierte man das Spinnen auch in der Volkskunst, besonders im Sprichwort, im Märchen und im Volkslied. In dieser Abhandlung behandle ich zuerst die Bedeutung des Spinnens anhand einiger Märchen mit dem Motiv

der *Schlafenden Schönen*, in denen das Spinnen oder die Spinnstube eine Rolle spielt.

Es ist bemerkenswert, daß Szenen mit Spindeln oder Spinnstuben im Märchen im Zusammenhang mit der Sexualität stehen. Zum Beispiel haben die Heldinnen in *Perceforest* oder *Sonne, Mond und Taria* von Basiles während des langen Schlafes nach dem Stich der Spindel ein Liebesverhältnis mit dem Helden. Davon werden sie schwanger und bringen nach neun Monaten ein Kind (oder Zwillinge) zur Welt. Zwar verschwindet dieses Motiv in *La belle au bois dormant* und *Dornröschen*, aber man kann die Spuren des Motives im Sinne der Psychoanalyse Freuds erkennen. Wie war aber in Wirklichkeit die Spinnstube des Volkes?

Im Mittelalter und in der Neuzeit sammelten sich die Mädchen des Dorfes an Winterabenden in der Spinnstube, um dort zusammen zu spinnen. Aber nicht nur die Mädchen, auch die Burschen gingen zur Spinnstube. In Wirklichkeit war sie Treffpunkt der Jugendlichen. Die Burschen halfen den Mädchen beim Spinnen, sprachen mit ihnen und sie tanzten oder tranken besonders beim Fest zusammen. Fetscher sagt: „Nun ist aber bekannt, daß während des ganzen Mittelalters und noch bis ins 18. Jahrhundert hinein an den langen Winterabenden die öffentlichen Spinnstuben oft und gern als Orte erotischer Spielereien benutzt wurden, die durchaus auch zu Schwangerschaften führen konnten. Während die Mägde und Töchter des Hauses spannen, pflegten die Burschen zu singen und sich den jungen Mädchen durch Liebkosungen angenehm zu machen.“

Die Kirche und die Obrigkeit verboten daher mehrmals die öffentlichen Spinnstuben, in denen unmoralische Handlungen stattgefunden hatten. Aber es war fast immer umsonst, weil Eltern und Bewohner im Dorf dergleichen zuließen und über das Verbot Stillschweigen bewahrten. Sie waren sicher, daß die Jugendlichen den künftigen Ehepartner in der Spinnstube finden konnten und diese Versammlungen der Ort zur Reproduktion der Dorfgemeinschaft war. Man ließ also die Verordnung

absichtlich außer acht. Aus der Sittengeschichte der Spinnstube kann man auch Konflikt zwischen den Regierenden und dem Volk der Unterschicht ersehen.

In dieser Abhandlung untersuche ich die Spinnstube der Jugendlichen anhand mehrerer Lieder, eines Spottblattes und eines Fastnachtsdramas. Darin kann man die wahren Verhältnisse der Dorfgemeinschaft sehr anschaulich erkennen. Da das Thema bei uns noch unbekannt ist, soll diese Arbeit auch zur Entdeckung der Volkskultur in Mittelalter und Neuzeit beitragen.